
全国中国語教育協議会準備会

ニュース 第0号 1996年12月20日

中国語教育者の交流を深め 中国語教育の充実を目指して

日本全国の、中国語教育に従事している方々に呼びかけて、大学・高等学校・専門学校、そして民間の各種教育機関を網羅し、教育者相互の交流を深め、外国語科目としての中国語教育を確立し、その充実をはかるべく、別記(P. 4)のアピールに基づいて、全国中国語教育協議会の準備会が、去る10月25日(金)に関西大学で大会を開いた。当日の記録は本ニュースのP. 2~4に掲載されている。今回の集まりは、組織作りを急がず、参加した方々のご意見を伺って、今後の展開を考えることを主眼に開催された。その結果、次のような活動方針案がまとまった。

- (1) 今後1年間は準備会として活動し、97年秋に予定する大会までに会の名称・組織・運営について、成案を得ることとする。
- (2) 今後1年間は、今回の世話人に暫定運営委員をお引き受け願う。
- (3) 当面の活動としては、ニュースの発行、夏期休暇を利用した中国語教員のための講習会や、不定期の経験交流会開催等を考える。
- (4) 参加資格は中国語教育に従事している者とし、企業等は除く。
- (5) 諸費用の実費を参加者が負担し、企業等の賛助金は受けない。

お願い 本会に参加を希望される方は、同封のハガキに記入し、ご返送ください。この方々には次号ニュース(4月予定)をお送りし、その際に費用(通信費+事務経費)を請求します。

【暫定運営委員】(50音順) 荒屋勸(大東文化大学) 今西凱夫(日本大学) 榎本英雄(明治学院大学) 大河内康憲(大阪外国語大学) 桑山哲郎(関西高校) 輿水優(東京外国語大学)〔代表〕 小寺研(大東文化大学第一高校) 中野貞弘(兵庫県立神戸商業高校) 中野達(國學院大学) 西川優子(中国語教育研究会) 平井勝利(名古屋大学) 吉田隆司(日中学院)

P. 1 全国中国語教育協議会準備会(ニュース)第0号

全国中国語教育協議会(準備会)大会開催報告

かねて準備の進んでいた全国中国語教育協議会(準備会)の初めての会合が、10月25日(金)午後2時～4時半に関西大学100周年記念ホールで開催された。出席の便をはかり、日程を翌26日から開かれる日本中国語学会に合わせたが、特にこの会合のためにだけ遠路参加された方も少なくなかった。

今回は正式発足前の集まりということで、ご案内状を200名余の方にしかお送りしなかったが、出席者の総数は約90名にのぼり、授業等でやむなく欠席された方々から寄せられた賛同、激励、資料送付希望も多数あった。以下に、当日の記録に基づき会合の様様をご報告申し上げる(文責編者)。

- 1 開会あいさつ 世話人を代表し輿水優氏(東京外国語大学)があいさつ。
- 2 司会者選任 世話人の榎本英雄氏(明治学院大学)を満場一致で選任。
- 3 開催の趣旨説明 世話人代表から、まず開催案内を日本中国語学会、高校中国語研究会の各会員有志と民間中国語教育機関の一部に送付したこと、世話人の委嘱、会の呼称等についての経緯を説明、つづいて中国語教育の現状と問題点を、今回の開催案内(p. 4参照)に即して説明するとともに、この会が種々の立場と意見を包括しつつ、個々の企業等の事業とは異なり、日本の中国語教育界の指針となる社会的財産を作り出して行く組織を目指したい、との方針が語られた。従って、一部に懸念をもたれた各種検定試験やHSKに対立するものではなく、むしろそれらを受容しつつ、よき方向に導くものにしたい、との発言もされた。なお、今回は会の組織づくりは急がず、出席者の発言を広く求めて、今後の方向を定めたい、という開催趣旨も示された。

- 4 中国語教育の現状と問題点に関する出席者の発言(世話人委嘱による)

(1)桑山哲郎氏(関西高校) 高校中国語研究会の歴史を紹介。74年11月に16校17名で第一回研究会を開き、今年は14回を数えるに至っている。

(2)中野貞弘氏(県立神戸商業高校) 高校中国語教育の現状と問題点に関して、半数以上が中国語

✍ Q & A ✍

Q: 次の会合はいつ?

A: 今回のような規模の会は1年後に、やはり中国語学会の時期に開きたい。東海大学湘南校舎の予定。

の免許状を所持しないこと、免許状があっても時間数が少なく(全国200校以上で中国語を置くが、ふつう4単位前後)、他教科の免許状も持って掛け持ちする要があること、非常勤に対する依存度が高いこと等を指摘、教員の確保、標準単位数の設定、ガイドラインの確立等が課題とする。

(3)中野達氏(國學院大学) 中国語の教育は、方法、組織、内容に統一的な基盤がない。検定試験も基盤が欠けている。現状打開に大同団結が必要。

(4)西川優子氏(中国語教育研究会) 中国語専攻者以外の中国語教員も多い。10年来、東京では年に2回、教材、教授法、教員のレベルアップを図り、中国語教育研究会を開いている。レベル評価に関しても検討が必要。

(5)平井勝利氏(名古屋大学) 現代中国語の音声研究は立ち遅れている。この会には、音声研究のレベルアップを目指して意見の交換を望みたい。

(6)吉田隆司氏(日中学院) 民間中国語教育機関といっても、専門学校、各種学校、株式会社、個人の家、団地のサークル等の形態があり、約200は把握。ガイドラインも大切だが、それに縛られたくないという気もする。

(7)渡邊晴夫氏(國學院大学) かつて20数年、高校で英語を教えたが、学習指導要領に沿った教科書に縛られていて不満であった。ガイドラインは必要だが、拘束性を持たせるべきではない。中国語教育に関する論文が少なすぎる。検定試験は英語と同様に、一つにしぼる必要はない。

5 今後の活動についての提案と意見交換 まず世話人代表の輿水優氏が、学習形態は異なっても、例えば一定の学習時間に対応する学習内容等について標準コースが考えられるのではないか、中国語学会の年次大会における教育分科会と両立させつつ、語学会のワクを越えて、中国語教育

／＼ Q & A ／＼

Q: 会費はいくらですか？

A: 当面は世話人代表のカンパでまかなっているが活動に参加するには来春、実費を請求する予定。

に携わる者を網羅した組織が求められる。活動としては、教員の講習会、教育関係の研究会、経験交流会等の開催、基準作りやその他の委託研究、ニュースレター方式による研究成果発表や資料・情報の提供ができよう。当面は世話人にご相談しつつ、世話役を引き受ける、と発言。

(P. 3から) これに対し出席者から、⇒中国語学会では不十分か。学会に高校の先生方も迎えたらい。⇒どうしても別の組織が必要であろうか。⇒新組織の名称は研究会の方が幅広く活動できる。⇒協議会では諸団体の利害がからむ。個人参加の学会では統一がとりにくい。⇒教育に限定した学会が必要。⇒中国語学会と両立で不思議はない。学会の方が発展性あり、等の意見が出た。つづく自由発言では、吉田実氏(朝日中国文化学院)が、遅きに失した、もっと積極性をもて、と発言、時間ぎれとなった。

6 閉会のあいさつ ご意見を世話人で総括し、年内に次の連絡をしたい。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

【再録】以下は関西大学で開催の会合に向け、有志に送付したアピールです。(前略)最近の状況は単なるブームや流行ではなく、中国語教育が、わが国の外国語教育のなかで一定の地歩を確立したかに感じられます。ご承知の通り、いまや高等学校で英語に次ぐ外国語科目は中国語となり、多くの大学で「英中仏独」の順に選択される傾向が強まっています。社会人の学習者も増加していると聞きます。しかるに、中国語教育の現場では、教育課程・教育内容・教材開発・教師の養成等々、検討を待たれている問題が山積しています。もちろん、20年前、30年前に比べれば、内外の中国語研究の発展はめざましく、その成果を吸収して中国語教育の水準は着実に向上しています。しかし、その大半は研究者・教育者個人々の努力によるもので、学会としても学界としても、中国語教育の諸問題を正面から取り上げる機会が、十分に得られているとはいえません。

高校の中国語教育では、ガイドラインの作成や教師の養成が急務とされ取り組みが始まっています。大学では関心は強いものの、具体的な動きは目立ちません。現在、中学校・高等学校の学習指導要領外国語科編のなかで、中国語は英語・ドイツ語・フランス語につづく「その他の外国語」に含められていますが、この象徴的な位置付けがつづくようでは、せっかく中国語の教室に来てくれた学習者の失望を買いばかりか、他の外国語と肩を並べることも難しくなります。一方、中国語教育の周辺では、センター・テスト外国語科目への導入、検定試験、HSK(漢語水平考試)、各種通信教育等々、教育者にとって対応を迫られる問題が続出しています。本来、関係学会等で一定範囲の関与をすべきだった、とお考えの方もあるようですが、現在の日本中国語学会は従来から学術研究の方面に力を注いでいますので、にわかに教育の問題に集中することも困難です。当然のこととして、中国語教育学会の設立を望む声も聞かれるのですが、現在の学会を分断せず、共存をはかり、さらに現在の学会では高等学校や専門学校からの参加が限られることを考慮し、このたび全国の中国語教育従事者を網羅した「全国中国語教育協議会」の発足を願って、広くご意見を結集するため、その準備会を開催することにいたしました。(後略) 9月18日

P. 4 全国中国語教育協議会準備会(ニュース)第0号